

## 第4回府立図書館サービスの充実に向けた検討会議の議事要旨

### 1 開催日時

平成28年1月26日（火）午前10時から12時15分まで

### 2 場所

京都府立図書館（京都市左京区岡崎成勝寺町9）

### 3 出席者

原田隆史座長、明致親吾委員、大槻政美委員、小川雅史委員、清水 清委員、千賀彰子委員、千歳則雄委員、富永敦子委員、内藤千鶴委員

### 4 会議の内容

- (1) 前回の議事録について
- (2) 基本方針案・サービス計画案について（協議）
- (3) 検討会議のまとめ素案について
- (4) 今後のスケジュールについて

### 5 協議事項

#### ○基本方針案とサービス計画案全体の書きぶりについて

- ・基本方針のⅠ・Ⅱで図書館の機能・役割、Ⅲでその発展系が書かれている。また、ISOの図書館パフォーマンス指標にもそった書きぶりになっている。
- ・これまでの検討会議の意見を取り入れていただいている。基本方針については概ね反対意見はないということでき取りまとめたい。
- ・サービス計画の「経緯と現在の状況」については、てにをは等、なお細かな修正を要する。

#### ○サービス計画の大項目Ⅰについて

- ・中項目1・2については、従来とあまり変わらないイメージだが、新しい取組がどこまで伝わるか。
- ・市町村へのレファレンス支援について指標となりうる実績値が挙がっているが、市町村立図書館からのニーズはどの程度あるのか。また市町村のレファレンス能力を向上させれば数は減る、周知に努めれば数は増えると考える。どちらの方向を目指すのか。
- ・レファレンスについては、webで簡単に調べられる時代になったが、資料に基づいて調べたいという要求はやはりあって、そういうニーズの掘り起こしが重要。
- ・単なる支援ではなく、レファレンスの質の向上という、よりグレードアップした観点のものがよい。レファレンス事例の蓄積と共有を念頭に、「市町村へのレファレンス機能充実への支援」とした方がよいのではないか。
- ・資料支援については、府立図書館がどういう資料を持たねばならないか、市町村が持ち得ないような蔵書を重点的に集めていくという意味を明確に打ち出した方がよい。
- ・「図書館を取り巻く情報」は、図書館職員に参考になる専門的なノウハウのことかと思われるので、もう少し書き込むべき。
- ・項目はこの内容でよいが、書きぶりで目新しさを出すということでまとめたい。

- ・中項目3・4については、「子ども読書活動の支援」が新しいこととして入った。
- ・学校支援については児童生徒の教育内容への支援だけでなく、教職員への支援の視点があると、学校全体への支援となって、幅が広がるのではないか。
- ・大学生は「調べ学習」というより、学術的な面を強めた方がよい。
- ・図書の活用は「調べ学習」だけでなく盛んに行われている。その意味で、「早い段階からの図書館活用」という観点を入れておくことは大切。
- ・特別支援学校への支援にからんでは、大活字本やDAISYの提供などを。
- ・子ども読書活動への支援については、子どもたちの調べ物や読書への意欲を満足させられるものと考えていくと内容に広がりが出る。
- ・児童書自体についての記述がないのが気にかかる。府立図書館が直接サービスをしないうちのは理解しているが、情報を提供するための取組はどうされるのか。
- ・中項目3は調べ物中心、中項目4は読書中心。両方を足したものが児童サービスであるが、その点が少しわかりにくい。
- ・中項目4については、資料について、きちんと情報が伝わって、きちんと貸し出せるように考えていくべき。
- ・新しいところは具体的に、そうでない部分も新しさが出るように。項目はこのまま、書きぶりはより検討を、ということでもめたい。

#### ○サービス計画の大項目Ⅱについて

- ・中項目5「資料の収集等」の「収集方針を適宜見直す」の部分は、方針がぶれるとの誤解を招かない表現がよい。
- ・中項目6の「収蔵空間の確保」は、この先5年10年での配慮かと受け止めた。ただし、「努力」については適切な表現に書きかえを。
- ・現在地では収蔵量に限界があるので、分散保存に向けての将来展望がほしい。またその場合、利用とのリンクをどう考えるか。
- ・大項目Ⅱは「多様な情報を取り扱う」と「歴史と立地を活かす」ということが乖離していないか。
- ・中項目14の「空間の構成」は、貸出サービスなどとの連動がない。空間の広がりの中かで考えてほしい。
- ・中項目11はなぜ「遠隔地」限定なのか。空間を超えたネットサービスに絞ってはどうか。
- ・府立図書館の本を取り寄せたいときは、市町村立図書館に行ってお願ひするのが一般的であって、webでアクセスする、とはなっていない。もう少し遠隔地の利用者へのアピールを。
- ・遠隔地へのサービスの充実について、色々なことを検討してほしいし、サービス計画に書き込めないまでも新しいことをできる余地があるようにしてほしい。
- ・若者に興味を持ってもらうためにはどう考えたらよいか。
- ・中項目8の「電子図書館サービス」などは、PCを利用する発想で組み立てられているようだが、今は大半がスマートフォン。高校生は、我々の意識と全く違うということから出発した方がよい。
- ・従来型のデータベースはスマートフォンでは利用しにくいので、調べ物以外に使える

データベースなども含めて考えたい。

- ・若者はほぼネットの世界で生きており、調べるからネットにアクセスする、のではない。生活の一部になるようなアプローチを。
- ・府立図書館から図書に行くのか、図書を探して府立図書館に来るのか、両方必要となる。現案だとネットのものを図書館が利用するというイメージ。ネットワークとの関わりについて書いていただきたい。
- ・多様な文化資源の情報を取り扱う拠点となるためには、どの機関とコネクションがあるか、そこで手に入る資料は何か、わかりやすく示してほしい。
- ・観光客や非在住者など府民以外へのサービスについても書き込んだ方がよい。既に、地域の人々となつながら図書館員がまちづくりに取り組む動きがある。京都の人にも外国人を含めた府外の人にも、こうした動きを楽しんでもらえればよい。
- ・府立図書館の職員は非常にユニークでいっぱい楽しいことをしている。もっと自信をもって外に向かってアピールされるべき。地に足のついた歴史ある図書館が、面白いことをやっている、というのをもっと出すべき。

#### ○サービス計画の大項目Ⅲについて

- ・中項目 16 の「場の創設」にからんで、職員の育成は非常に大切。場所貸しになることを避けるために、単純に外の人を呼ぶのではなく、一緒に作っていきけるということも大事。イベントの打ち出しも大切だが、広げていく、場をつないでいく、という観点を大事にした方がよい。図書館がどのように課題解決の拠点となるかイメージがしづらい。
- ・大項目Ⅰと大項目Ⅱはしっかりやっていくべきこと、大項目Ⅲは仕掛けそのものだと考える。Ⅲの中では、中項目 20 を前面に出して、仕掛けること自体を強調してもよい。様々な仕掛けを沢山するという要素を大事にしてほしい。
- ・中項目 19 の「行政支援」は表向きに出すことかがわからない。行政内部の話のように見える。市町村は入ってこないのか。市町村役場のニーズに応じて府立図書館がサービスしてもよいのではないか。
- ・他の県立図書館でも行政支援サービスを売りにしているところはあるので、その意味でも挙がっている。
- ・新しいことを仕掛けることを前に出すという意味では、中項目 16 は「ネットワーク」を重視した書きぶり、中項目 20 は「実験」を重視した書きぶりがよい。

#### ○タグラインについて

- ・打ち出し上、タグラインは必要。
- ・できるだけ親しみやすく、固いものでない方がよい。
- ・困ったときには図書館があるんだ、という感じが出るとよい。
- ・基本方針等の文言にとらわれず、できるだけわかりやすく作っていく方がよい。

#### ○評価の考え方について

- ・この会議のきっかけのひとつ。これまでは評価の指標が整理されていない、という状況。たとえば貸出数を考えてもこの施設のキャパシティを考えて、無限に延びていくとはならないし、無限に延びることが良いともならない。評価指標は数値だけではなく、サービスの中身が勘案されるべき。

一方、数値も重要。ゴールのない仕事ははじまらない。数値にこだわるべき項目はどれか、見極めを。

- 数値は大事だが、変化の原因は何か分析して評価することが大事。その意味で数値は必要最小限でよいのでは。
- 客観的な数値を誰にどう示すかという手法の問題。数値だけで成績をつけるものの考え方を変えていくようなアクションが重要。
- 数値は全体に必要であり、KPI（重要業績評価指標）については5年先の姿を描くことが重要。上を目指すのか、減らすのか、キープするのか、ありたい姿を考慮して、一度5年後を設定してみることに。
- 数値目標は必要だが、目指す方向を定め、変動要因をきっちり分析して数を活かせる形にしておく、というまとめになるか。